



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy



TOYO UNIV.

Newsletter No.16 2013. 7

南方熊楠のエコロジー

機構長：山田 利明

和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館には、熊楠が遺した膨大な筆記・メモ類が保管されている。もちろん図書・文書以外にも実験器具や標本など、明治から大正にかけての生物学・博物学の状況を示す遺品も多くある。そうした保管品の中に、明治43年に和歌山県知事に出された請願書（おそらく下書か）がある。当時神社の古木が伐り倒されることが多く、伐採の禁止を求めた請願であるが、中に「千数百年来、父祖が斧を入れざる神林は諸草木相互の関係はなほだ密接に錯雑しており、最近ではエコロジーという専門の研究さえ出来ている」（大意）とある。菌類や植物の研究を行っていた熊楠にとって、神社の古林はかけがえのない圃場であり、そのために伐採中止運動にのめり込んで行く。

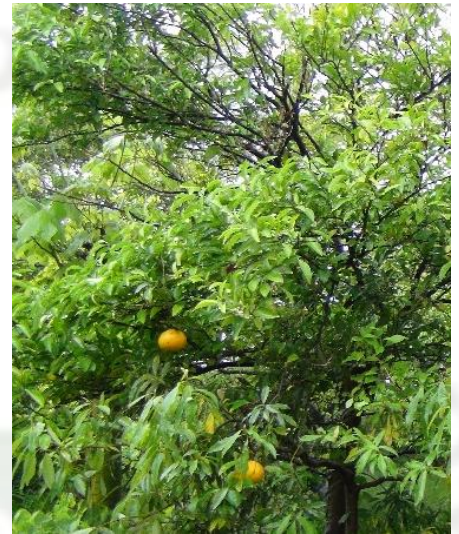


写真1：熊楠邸の庭の安藤柑

さて、ここで熊楠のいう「エコロジー」すなわちエコロジーは、正しく生物と環境との相互関係を論ずる生態学そのものであり、近年の環境論に重点を置いたエコロジーではない。文脈からは、エコロジーが新しく立ち上がった研究領域であったこと、日本ではまだそれに対する訳語がなかったことを窺うことができる。ただ明治の末には渡良瀬川の鉱毒事件もあって、ようやく環境問題に対する認識が起り始めた時期でもあった。

顕彰館に隣接して熊楠の旧居が保存されている。その庭も熊楠にとっては実験圃場であったようで、一時は数百種に及ぶ植物が植えられていたという。その中には、当時すでに栽培されなくなり、絶滅直前にあった安藤柑（安藤みかん）の木があり、後に天然記念物に指定された。安藤柑が廃れたのは、紀伊国屋文左衛門で名高い美味な紀州柑が多く栽培されるようになって、味の落ちる安藤柑が消えていったことによる。熊楠はこれをジュースにすると、味がまったく違って美味となることを発見して、自身では毎日これを飲み、人にも勧めたようである。天然記念物の安藤柑は熊楠の没後間もなく枯れ、現在のものは接木して採った二代目であるという。

この庭を歩いて気が付いたことは、自然のままに放置した庭ではなく、適度な手入れがなされていることであった。これは熊楠在世時からのことで、放置しておくことで植生が変わってしまうことが大きな理由であろう。つまり、自然との共生とはいうものの、それは人間が適切適度に手を入れることによって保たれるもので、必ずしも放置された自然状態ではない。例えば落葉樹と常緑樹を混植すると、ついには常緑樹だけの林になるという。こうして一山すべて常緑樹の森になると、植生だけではなくそこに住む生物全てに影響する。生態系そのものがあるのである。熊楠が訴えた神林の伐採中止も、植生や生態系の変化を憂えた結果である。知事への請願書にある樹木「相互の関係密接」である森林の生態を、きわめて適切に理解していたということである。

熊楠の時代は、19世紀に全盛を極めた博物学がそれぞれの分野に分れて、生物学や植物学あるいは分類学などの個々の分野として、より深化した領域へと発展していった時代であった。これは、博物学という総合学のもつ必然的な帰結であった。熊楠も時を同じくして菌類、ことに粘菌の研究へのめり込んでいく。

博物学の原語は“Natural history”である。そのまま訳せば自然史。そこには当然、環境の変化による生態系の変遷も含まれる。それをEcologyとして取り出したのはいつ頃か。おそらく明治43年をそれ程遡ることはないであろう。

昭和天皇は、植物や魚類の分類学で世界的に知られた研究者であった。紀州行幸の際に熊楠の進講をうけた。その時、熊楠は粘菌の標本をキャラメル紙箱に入れて献上した。はるかに昭和初期の頃である。献上といえば、立派な桐の箱か、柾目の通った杉箱に入っているものと思っていた天皇は、これを大変喜ばれたという。熊楠の人徳であろう。

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）は、自然観探究ユニット、価値観・行動ユニット、環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。

シンポジウム『妖怪学と環境問題—「お化け調査」は何を語るか—』

価値観・行動ユニット：大島 尚

東洋大学を創立した井上円了は、当時の大衆が信じていた妖怪現象は日本の近代化を妨げる迷信であるとして、「妖怪学」という学問でものごとを客観的にとらえる姿勢の重要性を説いた。しかし、近代化が進んだ今も、多くの人々が妖怪や不思議現象への関心を持ち続けているのはなぜだろうか。

菊地章太氏（東洋大学ライフデザイン学部）は、「もののけ姫」に登場するコダマ（木霊）を例にあげ、人間が安心して暮らせる環境では妖怪も安心して暮らせると語る。井上円了の時代には、人々のまわりにはあやかしがひそむ自然や漆黒の闇夜があり、それらを恐れる人々に科学的・合理的に考えることの重要性を訴える意味があった。科学技術の発達した現代に闇夜はなくなったが、科学への過信が自然破壊や悲惨な災害を招いている。菊地氏は、聖書にある「神を恐れることは知恵のはじめである」の「神」を「自然」に置き換え、環境問題と結びつく現代の妖怪学が必要とされているのではないかと主張する。

吉野諒三氏（統計数理研究所）は、調査研究において、データの背後にある人々の意識の深層に注意を払うことの重要性を説きながら、かつて林知己夫氏が中心となって実施した「お化け調査」の意味を解説する。この調査は、人々の素朴な宗教的感情、迷信、死生観などを、巧みな回答項目の設定により尋ねたものであった。吉野氏も同様の調査を行っており、「あの世を信じる」とする回答が最近の日本の若者で増加していること、国際比較調査ではシンガポール、台湾、日本などが霊魂や超自然現象に肯定的であるのに対して、中国やアメリカは合理派が多く否定的であることなど、合理的態度に国民性の違いがあることを指摘する。

真鍋一史氏（青山学院大学総合文化政策学部）は、日本・ドイツ・スウェーデンにおける調査から宗教意識を比較する。キリスト教のような「教義」を持つ世界宗教が、アニミズムのような原初的宗教の発展形だとする考え方に対して、ポストモダンと呼ばれる現代においては新しい傾向が生まれているのだという。調査結果から、デノミネーション（所属する宗派）をベースに、宗教的かスピリチュアルか、神の存在や霊的なものの存在を信じるかなどのデータを分析してみると、制度的な宗教から個人的な意味を持つ宗教意識への時代的变化を見ることができるとしている。

堀毛一也氏（TIEPh）は、超自然的信念の社会的リアリティや、文化・社会による幸福感の違い、さらには環境と共生する持続可能な幸福のあり方についても考えていくべきではないかと問題提起する。

（2013年3月16日開催）



「円了×熊楠—近代日本のエコ・フィロソフィ」

自然観探究ユニット：永井 晋



シンポジウム「円了×熊楠—近代日本のエコ・フィロソフィ」は、京都大学教授鎌田東二氏の特別講演、および東京大学の中島隆博教授、東洋大学の岩井昌悟准教授、「エコ・フィロソフィ」研究員の野村英登氏の三人によるシンポジウムの二部から構成され、(1) まず、日本のエコ・フィロソフィの最初の提唱者として南方熊楠に新たに光を当て、さらに(2) 彼の思想・運動との同時代的関連のなかで井上円了の仕事に新たな意義を見出す、という二重の目的を持ったものである。鎌田氏の特別講演「1910

年と南方熊楠と生態智」では、「1910年＝ハレー彗星問題」なる独自の視点が設定され、この年に同時多発的に起こった時代を画する諸事件が突き合わされることで新たな文脈が形成されて、その中で熊楠と円了に新たに光を当てることが試みられた。この年にハレー彗星が到来して初めて地球全体で同時に危機意識が芽生えたとされ、その中で熊楠の神社合祀反対運動が起こり、彼の自然科学、民俗学、密教、オカルティズムなどの諸要素が結びついてエコロジー＝生態智が誕生した過程が明らかにされた。これに続くシンポジウムでは、まず、中島氏がその報告「世紀の交の霊魂論」で、熊楠の霊魂論と円了の霊魂論に対するその批判を、中江兆民の議論を間にはさむことで政治的視点から見直すことを提案した。岩井氏は、円了の著作から

「宇宙万物に対する徳義」なる主題を発見し、そこに、革新的なものではないとは言え、円了の環境資源に対する考えを初めて明らかにした。野村氏の報告は、「円了における催眠術と瞑想法」という、これも新たな観点から円了の身体論を解明したものである。近代日本に初めて目覚めたエコ意識を軸として、熊楠と円了という、あらゆる点で対極にある二人の思想をそれぞれ斬新な観点から切り取って対決させるという試みであり、想定を超える大きな成果を出すことができた。

(2013年2月24日開催)

「天命はなお反転する 人間再生のための環境 —荒川秀作+マドリン・ギンズとともに—

環境デザインユニット：河本 英夫

20世紀を代表する世界的なアーティストである荒川修作は、2010年5月に亡くなった。荒川は、晩年名人芸に近かったみずからの絵画や造形を捨てて、新たな環境や建築を構想し続けていた。人間の能力をさらに引出し、健康を増進し、老化を遅らせるような環境設定を構想していたのである。たんなる持続可能な環境だけではなく、さらに人間の生存にとって有効な環境を考案しようとしていた。たとえばエレベーターの使用を控えて、電気を節約しようというのは、抑制的に環境に配慮することである。これに対して、エレベーターに乗るよりもはるかに楽しい階段を作ってしまうえば、健康にも能力の開発にも資するということを考えていた。こうした方向性は、今後のエコ・フィロソフィを展開するうえで、多くの接点を持ち、参照すべき典拠のひとつとなる。また知識は、つねに身体行為とともにあるという荒川の構想を引き継ぐ試みも、徐々に展開できている。

荒川の制作した「天命反転住宅」(三鷹市)を題材にして、DVD映画「死なない子供たち」が作られており、まずその作品の上映会と山岡監督の講演を行った。その後シンポジウムとして、河本英夫、花村誠一、池上高志がそれぞれ提題を行い、総合討論となった。さらに障害者のための環境設定に関連して、DVD映像先品「モア・ディヴェロップメント」(河本英夫作・プロデュース)の上演を行った。多くの参加者があり、マスクミの人たちも参加してくれて、長時間に及ぶ企画だったが、会場は熱気に溢れていた。



(2013年3月9日開催)

TIEPh 事務局から

2012年度のTIEPhの活動は、シンポジウムや、オーストラリア、韓国、山梨県道志村への視察、教科書出版など、多岐にわたりました。2013年3月16日には、茨城大学ICASとの共催国際セミナー「いのちと自然の尊さについて考える」を開催し、継続的な共同研究による成果も着実に蓄積しています。

2012年度のTIEPhの運営・研究体制に関し、外部の評価委員3名による総合評価はA(優)3名でした。TIEPhの多様な活動による学術的意義が高く評価される一方で、今後はこれまでの研究成果を、メディアを通して市民へと還元するという課題も提示されました。

2013年度は、各ユニットが連携した、より学際的かつ実践的な成果を示すよう、日々研究を進めています。



茨城大ICASとの共催セミナー



2013年3月、『エコロジーをデザインするーエコ・フィロソフィの挑戦』（春秋社）が刊行されました。本書は、東洋大学エコ・フィロソフィの教科書として、「自然」、「社会的ネットワーク」、そして「身体」の、折り重なる関係を捉え、「持続可能な世界」へ導くための方法の探求を主題としています。例えば、人工的里山・里海、循環するゴミ処理モデル、サステナブルな水資源利用、小さい建築の設計など、環境問題に取り組む際の、未来をデザインするための探求とアイデアを提示する画期的な教科書です。ぜひご一読ください。

2013 TIEPh 活動組織

(2013.7 現在)

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田 利明 代表（センター長） 環境デザインユニット
Takashi OHSHIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚 価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本 英夫 環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村 牧男 自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋 自然観探究ユニット
Tahoko SAKAI	Associate Professor, Nature Unit	坂井 多穂子 自然観探究ユニット
Ryosuke YAMAMOTO	Associate Professor, Nature Unit	山本 亮介 自然観探究ユニット
Asako NOBUOKA	Lecturer, Nature Unit	信岡 朝子 自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤 清志 価値観・行動ユニット
Kazuya HORIKE	Professor, Values and Behavior Unit	堀毛 一也 価値観・行動ユニット
Kazunari YAMADA	Professor, Values and Behavior Unit	山田 一成 価値観・行動ユニット
Naoya SEKIYA	Associate Professor, Values and Behavior Unit	関谷 直也 価値観・行動ユニット
Ichiro YAMAGUCHI	Research Fellow	山口 一郎 客員研究員
Yoshiaki IMAI	Research Fellow	今井 芳昭 客員研究員
Ayano TANAKA	Research Fellow	田中 綾乃 客員研究員
Ryo NISHIMURA	Research Fellow	西村 玲 客員研究員
Satoshi INAGAKI	Research Fellow	稲垣 諭 客員研究員
Taisuke KARASAWA	Research Fellow	唐澤 太輔 客員研究員
Yoshie HAYAKAWA	Research Fellow	早川 芳江 客員研究員
Dai IWASAKI	Research Associate	岩崎 大 研究助手
Hideto NOMURA	Research Supporter	野村 英登 研究支援者
Nobutoshi OKUBO	Research Supporter	大久保 暢俊 研究支援者
Shinji MUTO	Project Research Assistant (PRA)	武藤 伸司 プロジェクトリサーチ アシスタント

ニュースレター16号 平成25年7月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所：東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax：03-3945-7534

E-mail：ml.tieph-office@toyo.jp Website：http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/